

今に伝える……

わらし作り・棒遣

時を越えて、わたしたちにさまざまな思いを語りかけてくれる文化財は岩室村の大きな宝。その文化財を伝え育み、未来へと引き継いでゆくことはわたしたちの大切な役割のひとつです。
ここでは今月27日、28日と行われる和納十五夜祭りに関連して村の貴重な伝統芸能を守り、支えている人たちをご紹介します。

和納十五夜祭りにおけるみこし渡御の先導役を務めるのが『棒遣』です。約百年以上もの歴史があるこの演舞は、和納下町の農家の長男を主として、太刀方、棒方、そして中通りと拍子方の総勢10人の子どもたちが、9つの型を披露しながらみこしの露払い役を務めます。専用の衣装を身にまとい、股引、手甲、脚絆にわらし履きで正装した様は勇ましい雰囲気がいっぱい、まさに祭りの主役です。みこしのお供ということでは位が高いためか、昔銭湯の時代では『棒遣』の子どもたちは必ず一番風呂。床屋は無料だし、学校はお休みといった特権もありました。

靴を履くようになってきた田中さんは「やっぱり本当はわらしが一番なんだけどもねー。最近はお供の作りの人がいなくなって、5年位前から運動靴でやってたんだ。でも、やっぱりわらしじゃなくちゃ勇壮で古式ゆかしい雰囲気がないんだ。だから昨年、京都から既製品を取り寄せたんだけど、民芸品のようなもので弱くて、今は道路もアスファルトだしすぐにだめになってしまっただけでねー。だったらなんとか自前のわらしで作れないものかと考え、孫のためにひとはだ脱(だつ)と始めたんだ。」とわらし作りをはじめたきっかけを振り返ります。

「昔のわらしを参考にしよう見まねで作ってるんだけ、なかなか難しく、片方作るのにまだ1時間位かかるんだ。このわらしは特別なやつで、ほうろ、白い和紙が書いてある。これは『棒遣』が格式高いつて証拠なんだ。将来的には若いものにも覚えてもらって、この伝統をつなげていければいいんだけどね。」と作業を続けながら話していました。

今年の『棒遣』は先づいたちが心を込めてわらしを作ったその思いを身に着け、ほごりを持って勇ましい姿を披露するつもりです。



最高級品の和紙を均等に切る樋浦勲さん

わらしを編む
▲星野廣造さん(上)
▲田中勝衛さん(左)
▶竹内虎五郎さん(右)



篠笛作り・仕掛け花火 草花火

和納十五夜まつりの花火には欠かせない拍子方の笛。花火の耳を裂く破裂音と歓声とは裏腹に、哀愁に満ちあふれた横笛の音色は、伝統に培われた華麗なショーに味わいをかり注ぎます。

篠笛とも呼ばれるこの笛の製作者兼演奏家として伝統の技を守り続けているのは、和納12区の竹内巳作さんです。82歳の竹内さんは18歳から笛を吹き始め、40年前から篠笛を作り続けている篠笛界の第一人者。特に竹内さんの作った篠笛は音色が良く、県内外から多くの演奏家たちが竹内さんの笛を求めてやってきました。

和納十五夜祭りに吹く花火の拍子曲ですが、古い資料によると、何百年もの昔、和納の土地に流れ着いた平家の落武者が、村の人たちにお世話になったお礼として平家の秘曲を伝授してくれたものが、長年伝えられて今の花火の拍子曲になったと言われています。また、

昭和5年に東京の多摩川で全国花火大会が開かれた時、この和納花火の拍子方が招待されて、その当時珍しかったラジオの全国放送でこの曲を演奏したこともあったそうです。

そんな由緒ある曲を奏でる篠笛ですが、竹内さんは、篠笛製作の師である山際友三郎さんから譲り受けたという篠笛の寸法を記した古い図面を保管しており、竹内さんはこれまで部分的に4、5本の篠笛をこの図面から作っていました。ほとんどは市販の笛のコピーを作るものが多く、この図面による13本は組笛としては持っています。

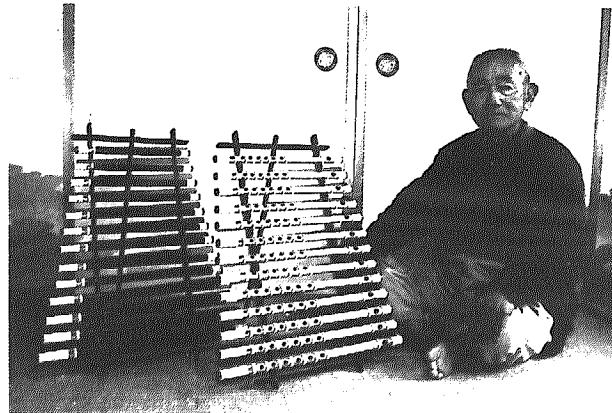
しかし今回、この古い図面に着目した新潟大学の佐藤峰雄教授の助言で、この独特の音階を持つ篠笛製作に取り組み、13本の篠笛を作りあげました。

「本来、この組笛は音階が一般的ではないので、世間に出しても通用しないんだが、佐藤教授の言うようにそんなに珍しいものなら、まあそれはそれでいいのかな。」

と竹内さんはあっけらかん。

しかし、佐藤教授によれば、「これは学術的、文化的にも、また全国的にもまれにみる珍しい音階を持つ組笛です。通常の一般的な笛は、2番以下や11番以上の笛はあまり使いません。3番から9番までが普通使われ、祭り囃子や神楽囃子などの民俗芸能では4番から7番が一般的に使われるわけですが、この図面による1組の篠笛は、よく使われる音域をさらにより使いやすいように細分して作られたものです。よって、この組笛は庶民の経験が生み出した、もっとも実践的、実用的な組笛といえます。その意味で、この図面は大きな有用性を持った貴重な図面ですね。」と解説します。

そんな珍しいなりというところで、今回、竹内さんから一般的な篠笛13本と、この独特の音階をもつ貴重な篠笛13本、合わせて2組26本を村に寄贈していただきました。



竹内巳作さんと寄贈された篠笛2組
①一般的な篠笛
②独特な音階の篠笛